

# こぎん刺しを生かしたコースターの製作

## —地域の伝統を知り，体験する授業—

津軽の伝統技法「こぎん刺し」を通して，それが発展した歴史的背景，こぎん刺しのデザイン性や保温性，耐久性などといった布の性質を知ることにより，津軽独自の文化を体験させ，津軽地方の良さや生活・文化について考えさせたい。

### 1. 授業のねらいと津軽地方のこぎん刺し

青森県では，津軽には「こぎん刺し」，南部には「菱刺し」という伝統技法がある。刺し子の技法の一つだが，他の刺し子との違いは，刺す目の数によって違う。奇数目で刺すのはこぎん刺し，偶数目で刺すのは菱刺しとなっている。

本校では，生徒が日常通る職員室前の廊下に長机が置いてあり，その上にこぎん刺しの小さなテーブルセンターが置かれている。そのため，目にする機会がある。

本単元では，手軽に綿製品を使えなかったことや衣類としての使用を禁止されていたために発展した歴史的背景や，見た目の美しさといったデザイン性，刺すことによる布の保温性と耐久性の向上について理解し，普段目にすることはあっても自分で作る機会がないこぎん刺しの実習を行うことにより，津軽独自の文化を体験することをねらいとする。

また，津軽に住んでいるということを実感することなく生活していた生徒達にも，こぎん刺しが全国的に注目されているということにも触れて，津軽地方の良さや津軽での生活や文化について考えさせたいと考えた。

### 2. 単元計画（12時間）

この授業は，3年生4クラス（151人）で1学期に実施した。また，授業だけでは間に合わない生徒もいたため，そのような場合は夏季休業中の課題とした。

学習内容	時間	学習のねらい
(1) こぎん刺しについて ・歴史とその背景 ・様々な機能性	1	・こぎん刺しが発展した歴史とその背景を理解する。 ・保温性，耐久性等の機能について理解する。
(2) こぎん刺しの製作 ① 作業 ・布と糸の扱い方 ・図案の見方 ・縫い方	1	・布の扱い方，目数の数え方について理解する。 ・糸の扱い方，図案の見方，縫い方について理解する。
②コースターの製作 ③仕上げ ・加工 ・アイロン	10	・図案を見ながら作業を進める。 ・作品を完成させる。 ・布端のしまつをする。 ・アイロンをかける。

### 3. 生徒の実態とこぎん刺しや津軽の文化とのかかわりについて

製作活動にとっても意欲的に取り組んでいた。最初は慣れないためか戸惑いも見られたが，授業が始まる前に準備に來たり，昼休み時間を使って作業をしようとした生徒達が出てきた。

授業に入る前には職員室前の廊下で目にするだけの存在であり，何度かはこぎん刺し製品を目にする機会もあったが，こぎん刺し製品を持つこともなければ，実際に自分で作ったこともない生徒達であっ

た。食生活については、「けの汁」という郷土料理は各家庭でよく食べられているせいか、津軽の文化を意識できるものはあるものの、衣生活に関しては「いかにも津軽」という意識をもって生活してきたことはなかったと思われる。

#### 4. 作品や作業の様子について

本授業では、弘前市内の手芸店からキット（3色の布と3色の糸、図案、こぎん刺し用針）を購入し、使用した。1枚だけを提出した生徒もいれば、3枚を提出した生徒もいた。



図1

慣れない作業ということもあり、初めは視線が図案と布目を行ったり来たりする回数が多かったが、作業にも徐々に慣れていっていた。

図案としてはそんなに複雑なものではないものの、初めて見るこぎん刺しの図案（白黒で描かれている）であるため、慎重に色ペン等を使い、自分がやった箇所にするしをつけながら作業を進めていた。（図1）

どんな実習でもあることだが、作業が進んで行くにしたがって、作業進度の差が出てきた。しかし、どんどん先に進んでいける生徒や自分が聞きやすい生徒の周りに集まり、教え合う場面が見られた。男女で教え合う場面はなかったものの、作業に黙々と取り組み、作品を完成させていた。

作業が慣れていくにしたがって、刺し方にも変化が

見られた。だんだん糸を引く力加減がうまく出来るようになっていった。

生徒にありがちなのだが、縫ったときの糸を引っ張る力が強くなりすぎて、引きつった状態になることがある。そのためにも普通の授業では「糸こき」するように指導しているが、今回は「糸こき」するのが難しいので、糸を強く引きすぎないこと（弱すぎてもダメ）や同じ力加減で糸を引くことを指導した。図2は、刺し終わったところである。

刺し終わったら、布端を簡単に加工した。裏布をつけてやる方法もあるのだが、今回は簡単に布端から1cm程度になるよう布のたて糸やよこ糸を抜くという方法をとった。



図2

#### 5. 地域の文化や技術をどのように見直したか

生徒達は、授業の中で自分達が実際に作業することで、その技術や作業が大変であることを実感していた。

そのため、職員室前の廊下の長机のこぎん刺し作品に足を止め、しげしげと作品鑑賞する場面が多く見られるようになった。これは特に男子に多く見られた。その感想は「すごい。」や「よくこんなに細かい模様を刺せるなあ。」などといった好意的な発言だった。

全国的にこぎん刺しやその製品が注目されているが、津軽に住む生徒にとっては普段から見ることも出来、デパートなどで様々な製品になって売られているのを目にすることが出来る。生徒達にとって、日常目にする技術であるため今まで気にも留めていなかったこぎん刺しだが、自分が津軽に生まれたことを誇りに思えるよい機会になった。